



12月11日(木)  
講義「教育・保育の「質」を高める架け橋期の  
連携・接続を目指して」

講師 京都府スーパーバイザー  
京都教育大学 教授 古賀松香 さん



■「架け橋」は特別なプログラムではありません。

➡架け橋は、“幼児教育と小学校教育をつなぐために新しいものを足す”のではなく、「今ある保育の質を上げながら、小学校での学びへ自然につながるようにする」という考え方です。



■「幼児期の育ち」がそのまま架け橋になります。

➡幼児期の経験そのものが小学校につながります。

①言葉で思考を深めていく

幼児期の子どもは、いろいろ喋ります。でも、それを“より豊か”にするには、先生の援助が必要です。「言葉を使って考えを整理すること」は、小学校の学びの基礎そのものです。

②他者と協働する力

色々な人と関わりながら、一緒に何かを成し遂げていく力は、幼児期の終わりまでに育てたい姿とも一致します。これは、“聞く力”や“相談する力”につながり、小学校の授業で生きてきます。

③経験→試行錯誤→発見

生きた知識は、先生の頭から子どもの頭へは移植できません。子どもが、確かめたり思考錯誤する中で、“ああ、こういうことか”とわかっていきます。

➡幼児期の学び方(経験に基づく学び)が、小学校での“自覚的な学び”の土台を作ります。

■「架け橋」は算数や国語の“準備学習”ではありません。

➡保育所・幼稚園・こども園は、算数や国語の“準備”をするところではないのです。生活で経験したこと、これから学ぶ教科を“つないでいく”場所です。

■遊びこそが「架け橋」の中心にあります。

➡“遊び”が学びそのものです。遊び心があって、その中で学びが立ち上がってきます。

■幼児教育と学校教育、双方の歩み寄りが必要です。

➡どちらか片方が合わせるのではなく、両方が歩み寄って“質”を高めていく必要があります。

\*幼児教育は“自発的・主体的な活動”を大事にして、小学校は、“教科学習”中心。それをどちらかが合わせるのではなく、互いが互いを理解して、“子どもにとって最適な連続性”をつくる。これが架け橋プログラムの目指すところです。

